

説教 『私の荒れ野にて』山本 護 牧師  
聖書 ホセア書2：16～17 マルコによる福音書1：12～15

受洗したイエスが荒れ野で誘惑を受ける場面、マタイとルカの福音書ではサタンとのやり取りが詳しく記されているのに、最初期の福音書マルコではほんの僅か。“霊”はイエスを荒れ野へ連れ出す(マルコ 1:12)。すると「イエスは 40 日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた。その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた(1:13)」。これだけの記述からいったい何が読み取れるのか。

荒れ野での「40 日間」とは、遠い昔、エジプトから脱出した民が荒れ野を 40 年間旅した(申命 8:2)ことの継承なのだろうか。注意深く読むと、他福音書ではサタン(悪魔)が離れ去っているが、マルコ福音書では荒れ野から退去していない(マルコ 1:13)。また危険な野獣も共にいて、それと同時に「天使たちが仕えていた」。サタンと野獣と天使が共存する「荒れ野」とは、いったい何であろうか。

荒れ野で、イエスの傍らにサタンと野獣と天使がいる。なんと奇妙な光景だろうか。考えてみれば、イエスの道備えをした洗礼者ヨハネ(1:7~8)の場も荒れ野であった(1:4)。荒れ野は生命の気配が極めて少ない。古代人は荒れ野を、生活領域から隔絶された、原初の混沌とした場と見なしていた。魔境であると同時に神聖な場所。この両義的な荒れ野に、イエスは留まった(1:13)。マルコ福音書によれば、荒れ野で引き受けた混沌は今も終わっていない、と読める。イエスは荒れ野の混沌を抱えたまま、故郷のガリラヤへ帰り、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい(1:15)」と告げた。

北方の境界ガリラヤは雨も多く自然豊かで、環境的にはエルサレム周辺より快適。また異民族や異文化が混生していて律法の締めつけもゆるく、私なら聖都エルサレムよりこの方がずっといい。

イエスが荒れ野から抱え続けている混沌とは、人間の根源的な何か。長閑なガリラヤの地でも、世界の各地でも、いつの時代にも妥当する、人間の宿命的な何かではないか。キリストは混沌を消滅させない。それどころか、今でも私たちの混沌を抱えて下さっている。天使とサタンと野獣が共棲する荒れ野は危険だが(1:13)、何かが起こされる創造の場。荒れ野には創造の風(霊 1:12)が吹く。イエスはガリラヤへ行き、抱え持った混沌において「時は満ち、神の国は近づいた(1:15)」と宣言した。

神の国の到来と共に、イエスは「悔い改めて福音を信じなさい(1:15)」と語った。洗礼者ヨハネによる「悔い改め(1:4)」を経て、天が裂けて御心が地に満ちる(1:10)。それはいつか。「時は満ち」つつある今だ。それはどこでか。「神の国が近づいている(1:15)」ここにおいてだ。「ここ」とはどこか。世であり、教会であり、そしてリアルに実感できるのは自らの「荒れ野」においてだろう。私たちは自分自身の混沌「荒れ野」において、恵みの「福音(喜びのおとずれ)」を聞く。創造の風(霊)に吹かれて自らの荒れ野に導かれ(1:12)、神の国へ迎え入れられる(1:15)。「御子への愛」を分かち戴いて(1:11)。

罪は赦され、私たちは浄められている。とはいえ、天使とサタンが共棲する荒れ野を、さまざまに再び汚れるだろう。だが私たちは汚れることを恐れない。自らの荒れ野で悔い改め、福音を聞きつつ近づく神の国を待っているから。裁きよりも愛の赦しを、死よりもキリストの命を信じるから。



【おまけのひとこと】

天使と悪魔を伴って旅するキリスト 荒野を抱えてどこへでも行く 光り輝く天使だけを供にした旅より楽しそう そうだ 天使も 悪魔も 思いのままにならないキリストとの旅が好きなのだ